

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第7号 野菜

発行日 平成21年 9月25日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4435)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆雨よけトマト 保温と裂果の発生防止
- ◆露地きゅうり 重要病害に対する防除の徹底
- ◆ほうれんそう 適切な温度管理と病害虫防除
適期は種と温度管理による品質の向上 (寒締めほうれんそう)

1 生育概況

- (1) 露地きゅうりは、成り疲れや低温経過で出荷量は減少傾向です。べと病、炭そ病、褐斑病等の発生により収穫終盤の圃場も目立ってきています。
- (2) 雨よけトマトは、低温経過により小玉傾向に加え裂果の発生が増加しており、出荷量は減少傾向です。葉かび病、灰色かび病の発生が増加傾向にあります。
- (3) ハウスピーマンは、草勢の低下や斑点病やうどんこ病の発生が増加傾向にあります。露地ピーマンも草勢の低下や果実肥大が進まない傾向にあります。
- (4) 雨よけほうれんそうは、現在ほぼ順調な生育となっています。一部ではハウレンソウケナガコナダニやシロオビノメイガ等の害虫による被害が散見されています。寒締めほうれんそうの播種が始まっています。
- (5) ねぎは、収穫が継続して行われていますが、病害の発生がやや多い傾向です。
- (6) 県北高冷地でのキャベツ・レタスは、7、8月の天候不順による生育不良の影響が一部で見られるものの、現在はほぼ安定した生育となっています。

2 技術対策

(1) 雨よけトマト

低温経過により裂果の発生が見られています。

今後、さらに発生しやすい条件が加わるので、夜間の保温に留意してください。この際、ハウスの密閉により湿度が高くなり、葉かび病や灰色かび病が再び多発したり、疫病が発生しやすくなるので、防除に努めてください。

また、裂果の発生軽減技術として全摘葉処理が有効です。全摘葉処理の方法は前号を参考にしてください。



写真1 全摘葉処理を行うことで、裂果の発生を 방지し収穫可能な果実が増加する。時期は9月下旬～10月初めまでとする

(2) 露地きゅうり

成り疲れと、炭そ病や褐斑病・べと病のまん延による草勢低下が顕著になります。本年は、特に炭そ病と褐斑病のほか、つる枯病や斑点細菌病の発生が多い傾向にあるので、効果の高い薬剤を選定し、防除に努めてください。この際、発病がひどい株は抜き取り、圃場外へ持ち出すことも必要です。

今後は、気温も低下してくることから強い摘心は控え、アーチから飛び出した弱い芯を指先で摘む程度に止めます。摘葉は病葉・古葉・黄化葉等を中心に行い、追肥は収穫量を考慮しながら速効性のタイプを施用し草勢維持を図りましょう。

本年度、株が急に萎れる症状が見られた圃場では、片づける前に根を引き抜いて表面にホモプシス根腐病による黒変症状がないか確認しましょう。疑わしい症状が見られた場合は最寄りの指導機関に連絡し、次年度以降の対策を検討してください。



写真2 ホモプシス根腐病による根の状態
(左上：黒変症状 右：200倍に拡大)

(3) 雨よけほうれんそう

年内収穫のためには種時期はほぼ終わりです。近年、秋の気温が高く推移する傾向が続いていますので、ハウスの開け閉めなどによる温度管理を適切に行い、現在生育中のほうれんそうが確実に収穫できるようにしましょう。

ハウスを閉める時間が長くなると、べと病の発生も多くなります。べと病抵抗性品種を利用している場合であっても、日中は積極的に換気して、病害が発生しにくい条件にしましょう。

ホウレンソウケナガコナダニによる被害が多くなる時期です。今年は夏期にも被害が見られたほ場がありましたので、今年被害があった圃場では、殺虫剤の散布を行いましょう。農薬散布は薬液が心葉まで届くように丁寧に行いましょう。また、一部地域ではシロオビノメイガによる食害が多くなっています。最初は心葉の隙間に入り込んでいるため見つけにくいので、注意して観察し、防除が遅れないようにしましょう。

作付け終了後は、来年の施肥管理の適正化のために、土壌診断を受けるようにしましょう。



写真3 シロオビノメイガによる食害 (矢印の部分に幼虫がいます)

(4) 露地葉茎根菜類

ア ネギ

気温の低下とともに生育は緩慢となってきていますが、最終土寄せから収穫までの日数が長くなりすぎると、品質の低下につながりますので、計画的な作業に努めましょう。

病害の発生が多い傾向ですが、農薬散布は収穫前日数に注意して適正に行いましょう。

イ キャベツ・レタス

県北高冷地の収穫は終盤です。作付け終了後のマルチ、残渣の処理を適切に行いましょう。病害により収穫できなかったものは早めに処理して、被害が蔓延しないように注意しましょう。

来年に向けて土壌診断の実施や堆肥施用による土づくりに努めましょう。

(5) 冬春野菜

ア 寒締めほうれんそう

パイプハウスを利用する場合は種期の限界は、地域や気象経過、品種、保温方法によっても異なりますが、10月中旬頃が目安です。

保温のし過ぎで生育が進むと、十分な低温に遭遇する前に収穫サイズに達してしまう一方、温度が低すぎると収穫サイズに達しないまま冬を越してしまいます。本県の寒締めほうれんそうの出荷期間は12月～翌2月が基本ですので、ほうれんそうの生育状況に応じて温度管理を行いましょう。詳しくは平成17年度試験研究成果「寒締めほうれんそうの作期判定と生育調節技術」を参照して下さい。

大雪の影響でパイプハウスが倒壊する場合があります。寒締めほうれんそうを作付けするハウスは1棟おきにして、作付けしないハウスはビニールを外す等、除雪しやすいようにしましょう。

イ 伏せ込み促成アスパラガス

気温の低下とともに地下部への養分転流が進む時期です。自然に地上部が黄化して枯れ上がるように、台風による倒伏などで茎葉が傷むことがないようにしましょう。

本年度も気温は高めに経過する見込みです。根株の無理な早掘りは収量の低下につながりますので、5℃以下の遭遇時間を参考にするなど適切な時期の掘り上げを心がけましょう（平成18年度試験研究成果「アスパラガス年内どり作型における1年養成根株の掘り取り時期」参照）。

農作物技術情報第8号は10月29日（木）発行の予定です。
気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。
※ 発行時点での最新情報に基づき作成しております。
※ 発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

9月15日～11月15日は秋の農作業安全月間
急ぐより 家族の笑顔を大切に 想う心で ゆとりの仕事